



真ク・リトル・リトル神話大系

Leapers and Other Tales of the 'Cthulhu Mythos'

IO

那智史郎編
国書刊行会

那智史郎

ダゴン秘密教団日本支部福岡教区長。

怪奇幻想文学研究会「黒魔団」同人。

ラヴクラフト、ダーレスをはじめとするアーカム＝ウイアード系の作家の研究につとめる。

74年 ダーレス研究誌「ク・リトル・リトルの枢」をガリ版により刊行。

76年 「ク・リトル・リトル神話集」(国書刊行会)で「インスマスの追跡」「イグの呪い」を翻訳。

79年 黒魔団会誌「CRYPT HORROR TALES」第15号「怪物小説編」編集発行。

82年 「真ク・リトル・リトル神話大系」第1巻で「爬虫類館の相続人」「妖魔の爪」を翻訳。

83年 「真ク・リトル・リトル神話大系」第3巻—第5巻を編集。現在に至る。

真ク・リトル・リトル神話大系

第10巻

昭和59年2月21日印刷

昭和59年2月29日第1刷発行

2,900円——定価

セイウ写真印刷株式会社——印刷

大日本製本株式会社——製本

落丁本・乱丁本はおとりかえます

著者——H・P・ラヴクラフト 他

編集——那智史郎

発行者——佐藤今朝夫

発行所——株式会社国書刊行会

東京都豊島区巢鴨3-5-18 郵便番号170

電話 03-917-8287 振替東京5-65209

目次

Contents

月に跳ぶ人	R・A・W・ローンダス……………7
屍衣の花嫁	ドナルド・ワンドレイ……………53
足のない男	ドナルド・ワンドレイ……………63
暗恨	リチャード・シーライト……………81
探綺書房	ヘンリー・ハッセ……………91
俘囚の塚	ゼリア・ビショップ……………125
深淵の王者	C・H・トンプソン……………181
ク・リトル・リトル神話と私	ブライアン・ラムレイ……………253
解説——那智史郎……………255	
附録・The Uncanny World of Cthulhu Mythos……………273	
附録・真ク・リトル・リトル神話大系事件簿——増田秀光・諸星翔……………1	

<i>Leapers by Robert A.W. Lowndes</i>	7
<i>The Lady in Grey by Donald W Andrei</i>	53
<i>The Tree-Men of M'Bwa by Donald W Andrei</i>	63
<i>The Sealed Casket by Richard Searight</i>	81
<i>The Guardian of the Book by Henry Hase</i>	91
<i>The Mound by Zealia Bishop</i>	125
<i>Spawn of the Green Abyss by C.H. Thompson</i>	181
<i>'Ochulhu Myrthos' and Myself by Brian Lumley</i>	253
<i>Editor's Note by Shiro Nachi</i>	255

本文イラストレーション——**楢**
ブックデザイン——**神田昭夫**

喜八

白川まり奈
権泰年
角慎作
水戸一行

TO
Mr. Donald Wandrei
AND
Mr. Robert W. A. Rowndes
———**Shiro Nachi**

月に跳ぶ人

Leapers

ロバート・A・W・ローンダス

福岡洋一

訳



このあとの手記は、一九四二年十一月に消息を絶ったアーノルド・グレイスン氏の財産管理人、マサチューセッツ州ドーカックスのクリフォード・ピアス氏から私の許へ送られてきたものである。手記に添えたピアス氏の手紙の説明によれば、一九四二年十月にピアス氏宛に送られてきたグレイスン氏の遺言状に、問題の手記をサウス・カロライナ州チャールストンのジェフリー・バー氏に、すでにバー氏が死亡している場合は、誰か怪奇なオカルトに関する出版活動に携わる人物に届けるよう記載されている、とのことであった。グレイスン氏が第一の候補にあげたのはファーンズワース・ライト（WFL誌の名編集長）だった（数年前に彼はヘウアー・ド・テールズ誌に筆名で作品を発表していたが、本名はこれまで公表されたことはない）。どうやらグレイスン氏は、一九四二年にはライト氏が、もう執筆活動を行なっていなかったことに気がつかぬままだったらしい。実は、一九四〇年に死亡していたのであるが、そして、ライト氏がそういった雑誌にもう関わりを持たなくなっている場合、手記の届け先はピアス氏が自分の判断で決めてよいことになっていた。

この点についてピアス氏は、手記自体からも窺えるとおり、何らかの緊張に晒されたことによるグレイスン氏の一時的な思い違いではないかとの考えを示していた。なぜかといえば、グレイスン氏がライトの死を知らないなどということはちょっと考えられないというのだ。私にはどちらともいえない。注意したのは、グレイスン氏がもう何年も小説を書いていなかったこと、およびジェフリー・バーとの手紙のやりとりも中断していた時期のあったことである。バーは「ライト・サークル」として知られる他の多くの作家たちとも手紙をやりとりしていたけれども、グレイスン氏がサークルとも、そしてヘウアー・ド・テールズ誌そのものとも接触を断っていた期間が三年か、あるいはそれ以上あったとすれば——そのくらい長期にわたっていたとしても不思議はないが——ライトの死を知る機会がなかったということもありうる。ところが、グレイスン氏の遺志に従って取扱われるべき手記は、ピアス氏の許に届けられたわけではな

いのだという。どういふいきさつで結局それを発見したかは、この前の冬——つまり一九六七年から六八年にかけての冬、ニューヨーク市で見つけたという以外、ピアス氏は何も語らない。また、手記のなかで触れられているバー氏との手紙のやりとりも、いつのことかはわからない。私につけ加えられることはただ、この手記が何年も封筒の中に折りたたんで入れてあったように見えるということだけである。

私は一九四二年の『ワールド年鑑』を調べて、この年の七月と十一月の満月の日付を確かめてみた。日付に過ちはなかった。一九一七年と一九二〇年の年鑑は、五番街のニューヨーク公共図書館には備えられていなかった。そして一九二九年版の見るも無残な状態を目にして、正直言って私は後でまたここへ来て長いあいだ待たされるのに耐える氣力を失くしてしまった。申し込んだ本が「下から」上がってくるまで、たいてい四、五十分も閲覧室で辛抱強く待ってはいくつはならないのである。その間何もできず時間を無駄にしたあげく（閲覧室への個人の雑誌・書籍の持込みは認められていない）、ぼろぼろのちぎれかけた役にも立たない雑誌を渡されるという目に早ばやと遭って、もっと深く探究してやろうという氣持が挫けてしまったわけだ。要するに私は、真の学者や研究者となるに必要な、根本的な熱意というものが欠けているらしい。

ブルックリンのベッドフォード・アヴェニュー二五七四番地には、確かに大きなアパートがある——少なくとも一九四二年にはあった。手記のなかの日付に一箇所打ち間違いがあり、「w」と「q」の文字が重なっている。私はそれを「2」と解釈したのだが、「3」の誤まりとも考えられるし、「23」のつもりで打ったのかもしれない——ところがこの三つの日付のどれも、一九一七年十一月の満月の日と一致しないのである。

もとの新聞の切抜きそのものではなく、ここに見るとおり、グレイスン氏はそれを引き写していた。ヴィ

ンセント・バー氏は申し訳なさそうに、すでに世を去った伯父の書類の多くは数年前の火事で焼失してしまいました、と私に告げた。彼は非常に好意的で、興味深い文書をたくさん——文字通り焼け残ったものはすべて——見せてくれたが、グレイスン氏の話に関係のありそうなものはひとつもなかった。この後の手記は、私にはひとつの物語としてお目にかかることしかできそうもない。

R A W L

I

新聞に熱心に眼を通している読者なら、都市部の午後の版のほとんど全部に或る小さな記事が載り、場合によってはラジオのニュース・レビューでも詳しく取りあげられたことに気がついたかもしれない。そして新聞によっては、おそらくその日の版にはそれ以降ずっとその記事が出ていたものと思う。どの新聞も見出しはほとんど同じ、記事自体の言葉遣いまで似たり寄ったりであった。

鉄の靴で月の引力に対抗

ブルックリンの研究家語る

ニューヨーク市ブルックリン、七月二十八日——月のせいで軽くなるのは何も頭にかぎったことではな

い、とブルックリンのベッドフォード・アヴェニュー二五七四番地に住むアーサー・クラークスンは確信している。昨日の氏の談話によると、地球の衛星が「地球の引力を打ち消して、地上の生物をその表面に引き寄せている」のだそうだ。

クラークス氏はさらに、自分自身も満月の「邪悪な影響を受けた」ことがあると語り、「抗いようもなく上に引きつけられる力」に耐えられたのは、頭を使って即座に工夫したからに他ならない、と断言した。

「つまり、自分の靴に鉄を詰めたんだ。さらに今、特別製のを一足、注文で作ってもらっているところだね。何だか妙なことが起こっているんで、不意を衝かれるのは御免だからな」

いったいなぜ月がそのような困った現象を引き起こすのかと問われたクラークス氏は、肩をすくめてこう答えた。「私は隠秘学^{オカルト}を研究しているんだが、今までこんな現象に出合ったことはないね」

「そのところは天文学者に聞くしかないだろうね」と氏はつけ加えた。「いずれにしても今後満月の出ているあいだ、いつもこの底に鉄を入れた靴をはくことにするよ」

さらに注目に価するのは、七月二十八日にラジオのWNYC局で読み上げられた行方不明者のリストが特別長かったことで、通常このために割当てられる二倍以上の時間を費し、その後に予定されていた音楽の特別番組に食い込んでしまったほどだ。もちろん読み上げられたリストには、前から名前の出ていた人物も含まれているが、「七月二十七日の夜あるいはその前後」に姿を消した人の数は驚くほど多かった。

とりわけ目立ったのは、このときニューヨーク市から消えた人たちの多くが二十二歳から三十歳までの健康な身体と平均以上の知能の持ち主で、いずれかの芸術に秀でていたという事実である。結婚したての

男女ひと組を除いて全員が独身者で——もうひとつ、どうやら見過ごされているらしい事実は——非常に想像力に富んだ頭脳を必要とする文学その他の芸術の創作活動を行なっていたことである。たとえば、行方不明者の一人は二十三歳の魅力的なブロード女性で、空想的、思弁的な小説を載せるパルプ雑誌の愛好者のあいだでは、イラストレーターとして広く知られていた。また二十七歳のある男性は、幻想的な宇宙的恐怖を扱う小説——つまりボーヤマッケン、ラヴクラフトらが専門にした種類の物語の分野で、いよいよ人氣が出てくるところだった。

行方知れずになった男女の誰ひとりとして、自分の身にふりかかってこようとしている運命を予感した者はいなかったらしく、どういうわけで姿を消すことになったかについて、何ひとつ手がかりは残っていなかった。またその後も、この人たちの消息はまったく聞かないままである。

一九四二年七月二十七日の夜に起こったことをもっと詳しく調べてみようというきっかけを作ったのは、七月三十日木曜日の午後の、まったく偶然の出来事だった。わたしはこのとき四十二番街のカフェで、アステイヤーの背の高いコップを前にして長々と、ある友人と話していた。仕事仲間のその友人は、頼まれた記事を纏めるために奇妙な失踪について自分なりに調査を進めていた。その結果の一部をわたしに教えてくれ、話が二十八日の火曜日の、異常に長い行方不明者のリストに及んだとき、勤務を終えたひとりの交通巡査が通りかかり、そこで足をとめると、話に加わってもいいかとわたしたちに尋ねた。先日、興味深い出来事があったというのである。

わたしたちが勧めた椅子に坐った巡査は、ポケットから新聞を取り出した。先ほど引用した記事の出ている新聞である。「このあいだの夜、似たような出来事に出合いましたね——たぶんあれは同じ晩だな、

七月二十七日ですよ」

「同じようなことを考えている人物に会ったんですか？」と友人が尋ねた。

巡査は首を横に振った。「いやいや、まるっきりこの記事どおりってわけじゃないが、でもずいぶん似たところがあるんですよ。その男はちょっと酒が入っていたもので、バスに乗るのに手を貸してやったんですが……ニューズ・アンド・チャニン・ビルあたりで人間が何人も飛んでいるのを見たというのです。べつに羽根が生えているわけではなく——ただ空中に跳び上がってゆくのだと。ずっと歩いてきてふと上を見ると、ビルの窓のひとつからつぎつぎに跳び出してくる——どのビルだかは訊き忘れましたがね。それを見た一瞬ヒヤッとしたものの、よく見るとその連中は下へ落ちて来るわけじゃない。驚いたことに、空に舞い上がってゆく——ちょうど夢で高い段の上から跳ぶと、いつの間にか自分の身体が宙に浮いているといった具合に」

わたしは頷き、こう尋ねた。「容貌はどうです？ 全然わからなかったんですか？」

「男の話ではみんな若かったそうです。娘も何人かいて、ブロードのきれいな子をひとり見たとか。もちろん、男が酔っ払っているのはわかってましたから、『ピンクの象』の類の幻でも見たんだろうと……ところが今日、電車の中でこの新聞を拾って——始めは古い新聞だと気がつかないで——そしてこの記事を見つけたってわけです。同じ妄想があちこちで出てくるっていうのも妙でしょう？」

（《第四軌道》会員の公式機関誌〈ソリテアリアン〉一九四一年八月号に掲載されたある論文からの抜萃）
「したがって『休戦状態』が保たれるのが《T》と《Y》側との力の均衡がとれている間のみでしかないと
いう点については、いささかの疑問を差しはさむ余地もない。この均衡がほんの一瞬でも破られるならば、